

平成 29 年度 東京理科大学学位記・修了証書授与式 祝辞

学校法人東京理科大学を代表いたしまして、一言お祝いを述べさせていただきます。

卒業生・修了生の皆さん、おめでとうございます。

本日、皆さんが多くの祝福のなかで、伝統と歴史ある東京理科大学の学位記・修了証書を手に巣立たれることを、心からお祝い申し上げます。また、ご列席の御父母の皆様におかれましては、お子様が進級・卒業の厳格な“実力主義”の東京理科大学を、無事、卒業・修了されたこと、さぞお喜びのこととお祝い申し上げます。

皆さんの門出にあたり、理科大の卒業生として、どのように生きるべきか、どのように生きてもらいたいのか、理科大の理事長として、また、数十年前に理科大を卒業した先輩として、お話しをさせていただきたいと思います。

明代の洪自誠が著した『菜根譚』に次のような一節があります。「完名美節は、宜しく独り任ずべからず」。業績の向上も、驚異的な躍進も、その評価を独占し、全てを自分でやったという顔をしてはいけない、という意味の言葉です。成功は、献身的で優秀な部下に恵まれたからであり、また、“時流も自分に与してくれた”“タイミングが良かった”“運が良かった”と僥倖を喜ぶべきで、自分独りの成果と思った際も、自分

をサポートしてくれた周囲の人々のおかげであったと振る舞うことのできる人には余裕が感じられ、その余裕が人品骨柄を高めていくのです。

世間に目を向けると、昨今、政治や経済の場で起こる不祥事は日常茶飯事となっており、様々なメディアを通じて世間に伝えられています。明らかに責任者であると目される人が何とか逃げようと、ノーコメントの一点張りで通そうとしたり、始めから開き直って“何のことかわからない”“忘れた”などと平気うそぶく姿を目にします。しかし、このような対応は、自分が悪かったと認めているに等しく、大変見苦しいものです。本来、責任ある立場の人間は、毅然として、悪は悪であると断じる姿勢を示す必要があります。

また、東京理科大学での学びを通じて、論理的な思考力を身につけられた皆さんには、今後、自分の主体的な見方を確立する意味でも、必ず、自分自身で、直接、事実確認を行い、正しい自己判断による生き方を貫いてもらいたいと思います。人生は、山あり谷あり、人は評判が上がったり下がったりします。しかし、見る人は見ています。心ある人は必ずいます。そこに世間の善意や良識がひそんでいます。

いずれにしても、世間は冷たくもあり、また、温かくもあります。そういう柔軟な見方ができることが、人間の器を大きくしていくうえで重要なのです。自他を問わず、

悪い評判と事実を確認し、真実を見る目を養いましょう。そして希望を失わず、謙虚に自分の道を歩んでいきたいものです。日々の地道な積み重ねが、確実に皆さんの人間力を磨いてくれるのです。

自分は自分であり、自分以上になれない。自ら高く見せようとするのではなく、高めていくのです。自分自身の実力を積み重ねていって、明日の自分を今日の自分以上へと高めていく、その積み重ねが、品のある人間を作り上げるのです。

従来から、東京理科大学の卒業生は、質実剛健・実力主義、群れない、ツルまず、徒党を組まない。権威に媚びず、独立独歩で我が道を行く。それが理科大の教育であり、私も卒業生として、理科大で学んだことを誇りに思っています。

それから、もう一つ。社会に出たら、いつも前向きな気持ちに心がけてください。逆境や不遇のときも、前向きにとらえると同時に、自分は運が強いと強く思って積極的に生きていくことが大切です。明けない夜はないのです。逆境にあっても、それを順風と受け止めるのが、運を好転させるコツです。

幸福を招き、災難を避けられるのは、喜神を養った、つまり、明るい笑顔を磨き、楽しみ喜ぶ心を養った努力の結果です。喜神を呼ぶには喜神を養わなければいけない

のです。喜神というのは喜びの神様とか、喜びを作る神様です。明るい笑顔が喜神を養います。

最後になりますが、皆さんには、東京理科大学で学んだことを誇りに、今後の人生を歩んでもらいたいと思います。理科大の卒業生として、決して下品にならず、品格のある生き方を意識して、今後も、一日一日を大切に過ごし、健康に恵まれ、心豊かな人生を送られんことを祈念して、私の祝辞といたします。

皆さんのこれからの大いなる成功・活躍を期待しております。

本日は、誠におめでとうございます。

平成三十年 三月 十九日

学校法人 東京理科大学

理事長 本山 和夫